

# 研究紀要

第19号

2004

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

# 目次

序

## 〔論文〕

- 砂川期の基礎的研究(2) —ナイフ形石器を廻る諸問題(上)—  
.....西井 幸雄 ( 1 )
- 押型文系土器群と沈線文系土器群終末期の関係性  
—絡糸体圧痕文土器の分析を通して画期を探る—  
.....金子 直行 ( 25 )
- 加曾利EⅢ式土器の拡散とフィードバック(前) .....橋本 勉 ( 87 )
- 竈筆形注口土器の成立と展開 .....上野真由美 (109)
- 方形周溝墓と土器Ⅱ —概観 その1— .....福田 聖 (133)
- 埼玉県北部における10世紀以降の土師質土器  
.....永井いずみ (169)

# 埼玉県北部における10世紀以降の土師質土器

永井いずみ

**要旨** 10・11世紀の土器はロクロ使用の土師質土器が主体的である。だが、この土器の実態に関しては、あまり明確になっていない。そのためその名称の共通した認識もないのが現状である。そこで、今回はこの土器が多く出土する埼玉県北部地域の土器を検討し、土師質土器の時期的・地域的な拡がりをつまららかにし、その実態に即した名称を付けることを目的とする。その結果、土師質土器には10世紀前半から中頃までに生産された須恵系土師質土器と、それ以降11世紀まで生産されるロクロ土師器の2種類があるという結論に至った。

## はじめに

10世紀になると遺跡からはロクロを使用した酸火焔焼成の土器が多く出土する。この土器はそれまでの土師器や須恵器に代わって、平安時代の終わりまで主体的に出土し、中世まで継続して使用される土器とされている。しかし、その名称は「土師質土器」、「ロクロ土師器」、「須恵系土師質土器」などと様々な名称がつけられており、その位置づけは研究者によって異なっている。また、時間的・地域的な拡がり、具体的には明確になっているとは言えない。筆者は以前「大寄遺跡II」においてこの土器について検討し、大寄遺跡から出土するロクロを使用した酸火焔焼成の土器を、「須恵系土師質土器」と「ロクロ土師器」の2種類の土器があると結論づけた。このような分類に妥当性があるか否かは、他の遺跡出土の土器を検討しなければならない。そこで今回は大寄遺跡周辺を中心に、埼玉県北部に地域を拡げて検討する。

## 1. 研究史

筆者は前回の拙稿において、研究史の章で中沢悟氏、服部実喜氏、佐々間豊氏、福田健司氏の各説を紹介し、これらは酸火焔焼成の土器を1つの概念でとらえている（永井 2002）としたが、再度検討した結果、私の理解が至らず、誤認していた。まず中沢氏は「土師質土器」を須恵器の範疇としながらも、須恵器とは異なるとしている（中沢1981）。そして両者の違いを器形、焼成等の項目を挙げて指摘している。それによると、例えば須恵器の高台の付け方は確で土師質土器はいていであるとして述べている。一般的に須恵器の高台の付け方は丁寧であると考えられる。しかし、ここで氏が挙げている須恵器とは「10世紀頃の大きく変質しつつある」酸火焔焼成のものを指しているためと考えられる。まとめの平安時代の土器編年をみても、第3期の須恵器はほとんどが軟質であり、第4期前半には酸火焔焼成に転化するとしている。そして、この期に須恵器は消滅し、土師質土器が出現するとしている。つまり氏は酸火焔焼成の土器を須恵器と土師質土器に分けて考えていると思われる。では、「ロクロ土師器」を使用している服部氏はどうか。氏は、関東地方の須恵器生産をVI期にまとめ、この時期を酸火焔焼成への転換を関る段階としている（服部1983）。また、「ロクロ土師器と須恵器、そして土師質須恵器で構成されるもの」との記述から、ロクロ土師器と土師質須恵器を分けていると考えられる。これらを

ふまえると、中沢氏の「土師質土器」と服部氏の「ロクロ土師器」は、佐々間氏の指摘通り（佐々間1986）、同様の土器を指しており、その土器と酸火焼成の須恵器を区別しているという点では、両氏の意見は共通すると考える。しかし福田氏の「須恵系土師質土器」は、異なった位置付けがなされている。氏はロクロ使用の酸火焼成の土器は全て須恵系土師質土器としている（福田1995）。ここに前者2人との大きな違いが現れている。

次に、埼玉県北部の酸火焼成の土器は、これまでどのように位置付けられてきたのかについてみていく。中沢氏の「土師質土器」提唱以前は、例えば枇杷橋遺跡（駒宮1973）や大久保山遺跡（佐々木他1980）のように土師器か須恵器のどちらかにするものや、下田遺跡（柿沼1979）・顕彰神社前遺跡（中村1980）のように須恵器とし、備考に軟質や酸火焼成と記載するものがある。ここで注目したいのは、『田中前遺跡』の結語における市川修氏の土器分類である（市川1977）。氏は坯を（Ⅰ）A～F類に、高台付坏・碗を（Ⅱ）A～D類に分類している。そして、ⅠB類をⅠA類（土師器）の系統を引き、須恵器及び須恵系との関係の中で位置付けが想定できるとし、ⅠD類を須恵器及び酸火焼成の土器として位置付けている。名称ははっきりと言及していないが、1970年代に土師質土器を土師器の系統を引く土器と、酸火焼成の土器に分類したことは、高く評価出来ると思われる。

1980年代は先に挙げた土師質土器の提唱をうけて、上敷免北遺跡ではこの名称が用いられている（澤出1988）。しかし、この報告書では、前稿で筆者がした誤った解釈と同様に、酸火焼成の須恵器を含めて土師質土器としている。報告者が何を基準として土師質土器とするのかを明確にしないと、用語の混乱が生じてしまう。1986年には神奈川考古同人会により「古代末期～中世における在地系土器の諸問題」というシンポジウムが開催された。この資料集で北武蔵を担当した浅野晴樹氏は、Ⅱ期までの土器を須恵器とし、その土器について「焼成も悪く、酸火焼成に近いものが多い。前段階に比して製品間の不揃いさが目につき、器内も厚く粗悪なつくりである。」と述べている（浅野1986）。さらにⅢ期からは、須恵器に代わって「ロクロ土師器、土師質土器とか須恵系土師質土器などと呼称される土師器的な胎土と質感で、ロクロ成形された一群の土器の占められる。」として、この論考では便宜的に土師質土器と呼称している。酸火焼成の土器を須恵器と土師質土器とに分けて、土師質土器が酸火焼成の須恵器に後出するとしている。このシンポジウム以降、1990年代前半までは須恵器か土師質土器の名称を用いるものが多くなる。

1990年代後半になると資料の増加に伴い、さらに複雑な様子をみせる。渡辺氏は「武蔵国の須恵器生産の各段階」で、武蔵国の須恵器生産を1～4段階に設定している（渡辺1995）。そして4段階を「里の須恵器の成立する9世紀末葉から、須恵器の消滅する10世紀後半まで」とし、「里の須恵器」という名称を提唱した。渡辺氏はこの「里の須恵器」を、窯の規模的には縮小に向かうが、構造的には連続しており、3段階との違いは分布状態と作業規模の違いとしている。また窯で焼成しても多量の酸火焼成の製品があり、土器焼成坑の製品との区別があいまいであると述べている。また技術的にも同一系統上であり、区別は困難であるとも指摘している。この「里の須恵器」という考え方は、筆者の須恵系土師質土器の設定に非常に参考になるものである。1997年「中堀遺跡」が刊行された。そこでは、また別の用語が使われている。須恵器を還元焼

焼成（S）、還元焰焼成だが軟質（NS）、酸火焰焼成（HS）の3種類に分けている。分類の基準は焼成と色調であり、9世紀代の須恵器と10世紀以降の土師質土器を同列に考えている。同年、富田和火氏は「古代の土師器生産と焼成遺構」の「関東西部」において、土師器焼成坑には2つのタイプがあり、B類焼成坑で焼成された土器を「ロクロ土師器（須恵系土師器）」としている（富田1997）。この土器は、御蔵山中・東北原・和山北遺跡などの大宮台地上と新開遺跡などの須恵器生産地に近接する遺跡でみられるとし、新開遺跡などから出土する土器は「焼成器種の形態や組成から須恵器工人から転身した可能性が高く、文字通り「須恵系土師器」を焼成したと考えられる」としている。この鋭い指摘は、これらの土器の生産体制を考える上で、非常に良好な意見である。1999年、末木啓介氏は「埼玉県における平安時代の黒色土器と土器生産について」の中で、ロクロを使用した酸火焰焼成の土器をその出自は賛同しかねるとしながらも、福田健司氏の須恵系土師質土器という名称が適当であるとしている。2001年『大寄遺跡Ⅰ』において、富田和火氏は埼玉県北部の報告書の中で、はじめて「ロクロ土師器」という名称を使用し、羽釜出現以降の土器として位置付けた。また氏は小皿を指標としたA～E期の編年案を提示された。

以上、埼玉県北部に限ってロクロ使用の酸火焰焼成の土器がどのような位置づけで、どんな名称で呼ばれてきたかについてみてきた。須恵器（酸火焰焼成・土師質須恵器・軟質須恵器・赤焼き）とすると、10世紀以前の須恵器の中にある酸火焰焼成のものとしてそれ以降の土器が区別できなくなってしまう。また研究者によって、須恵器との境は一様ではなく、かつあいまいであり、同じ土器でも異なる認識がなされている。これらのことが、土器の名称だけでなく実態を把握することも困難にしている。

## 2. 土器の分類

前稿で土器の分類の基準を示したが、今回の基準も基本的には前回と同様である。焼成だけでなく、ロクロの挽き方や高台の付け方、そしてつくりの良悪を観察しながら、分類を試みた。土器を実見する前は、この時期の土器は、資料が少ないことや個体差が激しいなど、分類には困難が予想された。確かに判断しきれない土器もあるが、その中でも確実に分類できる土器が示すことができた。そして、器形的な特徴や土器の厚さも分類の基準になることが分かった。その結果、埼玉県北部の10世紀以降の土器は6種類に分類することができる。以下、各類の特徴について述べていく。なお分類する土器は坏・椀などの供膳具であり、煮炊具は含まない。

### 【a類】

ロクロを使用せず、酸火焰焼成されたもの。坏、高台付坏がある。口縁部はヨコナデ、体部や底部はヘラケズリ調整、もしくは調整を行わない。10世紀以前では坏のみだが、この時期から高台付坏がみられる。高台は非常に小さなもので、機能性には欠けている。いわゆる土師器である。

### 【b類】

ロクロを使用し、基本的には還元焰焼成されたもの。硬質なものが多いが、一部には、軟質や、酸火焰焼成のものもある。坏、椀、皿、高台付坏、高台付椀、高台付皿がある。ロクロの挽き方は丁寧で器壁は薄い。底部は糸切りされており、高台付坏の高台の作りや貼り付け方は丁寧である。いわゆる須恵器である。

### 【c類】

ロクロを使用し、還元焰焼成だが軟質なもの。焼きむらがあるものが多い。環、高台付環、高脚高台付環がある。b類に比べてロクロの挽きはあまく器壁も厚い。底部は糸切りされており、高台の形はバラエティーがあるが、b類の高台のように意識して丁寧には作っていない。雑なものでは粘土紐を軸にして、貼り付けただけのものがある。

### 【d類】

ロクロを使用し、酸火焰焼成されたもの。焼成以外はc類と同じ特徴が挙げられるが、c類よりさらに雑なつくりのものが多い。

### 【e類】

ロクロを使用し、酸火焰焼成されたもの。焼きむらがd類ほどではない。環、高台付環、椀がある。器形はd類と共通するが、ロクロの挽きは丁寧で器壁も薄い。底部は糸切りされており、高台のつくりも丁寧である。

### 【f類】

ロクロを使用し、酸火焰焼成されたもの。均一に焼けているものが多い。小皿、椀、高台付椀、高脚高台付環がある。ロクロの挽きは丁寧で、器壁は薄いものが多い。底部の調整は糸切りとヘラ切りの両方がある。高台付椀は内面黒色処理とミガキが施されているものが多い。

各類の特徴を述べてきたが、誰でも簡単に出来る分類の基準が示せたとはいえない。しかし、この時期の土器は同じ類でも、器形や作りの良悪には個体差が激しく文章や報告書の図版だけで分類することは非常に困難である。実見することが望ましい。

## 3. 各地域の様相

次に、c～f類の土器が出土する遺跡は、妻沼低地の自然堤防上、本庄台地東端と櫛引台地北端、本庄台地北西部、兎玉丘陵や松久丘陵の先端部に立地する。各遺跡の該当する上器を実見の上分類し、住居ごとに並べてみた。すると、供膳具の各類と煮炊具のセット関係に地域ごとの特徴がみられた。もともと出土量が豊富で特徴が顕著な地域は、大久保山遺跡周辺地域であった。そこで、まずこの地域の煮炊具を軸に、供膳具を各類ごとに並べ、その特徴を述べていく。

### 【大久保山遺跡周辺地域】

大久保山遺跡周辺地域は、主に大久保山遺跡と清水谷遺跡が挙げられる(2～8図)。他には、下田・龜轟神社前・古川端・向田遺跡がある。まず、煮炊具をⅠ～Ⅶ群に分ける。Ⅰ群は北武蔵型甕のみ、Ⅱ群は北武蔵型甕と羽釜が共伴する。Ⅲ群は北武蔵型甕と、口縁部に特徴をもつロクロ成形の甕と羽釜が共伴する。Ⅳ群は羽釜のみ、Ⅴ群は羽釜と口縁部が「くの字」状になる甕が共伴する。Ⅵ群は胴部から底部を縦にヘラケズリする羽釜と群馬県で土釜と呼ばれる甕が共伴する。Ⅶ群はⅥ群と器種構成は同じだが、羽釜の胴部が張るものになる。次に、a～f類に分類した供膳具を住居ごとにまとめた。なお群内の住居ごとの順序は供膳具a類からf類の順序か、口径の大きい土器をより先に並べただけで、正確な新旧関係を示しているわけではない。

Ⅰ群はd類が主体的である。a～c・e類が出土している。f類はみられない。d類は環と高台



S=1/100000

第一网测定位图

- |    |       |
|----|-------|
| 1  | 大久保山  |
| 2  | 下田    |
| 3  | 清水谷   |
| 4  | 臨濟神社前 |
| 5  | 古川端   |
| 6  | 向出    |
| 7  | 大寄    |
| 8  | 西浦北   |
| 9  | 町田西   |
| 10 | 砂田前   |
| 11 | 熊野    |
| 12 | 中宿    |
| 13 | 本郷前東  |
| 14 | 新屋敷東  |
| 15 | 砂田    |
| 16 | 居立    |
| 17 | 皿沼西   |
| 18 | 上敷免北  |
| 19 | 金佐奈   |
| 20 | 十二天   |
| 21 | 中堀    |
| 22 | 田中前   |

付環の両方があるが、大久保山と下田は環の口径が13cm前後、高台付環の口径は13~14cmであり、深身に椀に近い器形をしている(2図2~13)。清水谷は環が11~12cm代で、高台付環が12cm前後とやや小ぶりである(2図18・19・25~28)。e類の高台付環も大久保山が大きく清水谷が小さい。これが時間差であるのか、遺跡間の差なのかは、不明である。但し、要から判断すると両者に時間差はあまりないように思える。I群の北武蔵型甕は「コ」字状口縁が退化し、器壁が厚くなったものである。口径18~22cmである。そして、口径10cmと13cmの小型甕(2図4・29)が伴う住居がある。おそらく台付甕と考えられる。

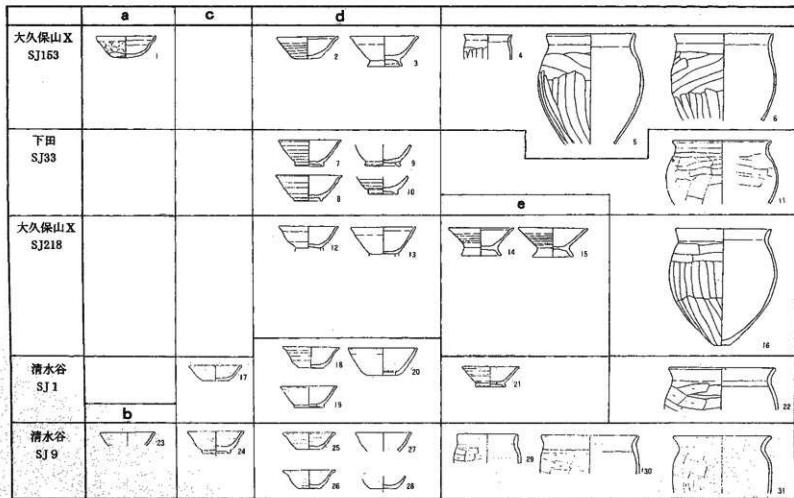
II群は、a・b類はなく、c~e類がみられる。I群同様d類が主体的である。しかし、量的には少なくなる。f類はやはり見られない。d類は環と高台付環があるが、高台付環のほうが多い。環は口径が11.5~12.5cm(3図2~15)である。高台付環は口径が11.5~13cmで高台が低いタイプ(3図3・4・8・25)と、口径14cmで高台の高いタイプ(3図9)がある。c類はI群と同様、環と高台の低いタイプの高台付環がある。e類は、口径が10.5cmの環と、口径12.5cmで割がれているが、おそらく低いタイプの高台が付く高台付環と、14.2cmの高台の高いタイプ

がある。煮炊具は北武蔵型甕と、ロクロ成形の羽釜や羽釜形甕が共存する。北武蔵型甕は口径が20~23cmとI群に比べて若干大きくなっている。羽釜は口径18.5~22cmである。ロクロ成形した後、胴部下半から底部までを縦方向にヘラケズリしている。羽釜形甕は3図7のような口縁部に3図18のような底部を持つ器形である。口径が約29cmで羽釜より大きくなる。小型品は、口径が11cmの小型甕(3図26)や口径14cmのロクロ整形の小型甕(3図10)が出土している。ロクロ成形の小型甕は、作りがロクロ成形の羽釜と共通する。

III群はb類以外のa・c~f類がみられる。主体的なのはやはりd類である。a類はこれまでみられた環とは異なり、高台付環がみられる(4図24)。口径は14cmと大ぶりである。c類は高台の低いタイプの高台付環が出土している。d類は環よりも高台付環が多くみられる。4図14・26は高台付環である。口径は12.0、12.4、13.0、15.0cmとばらつきがあるが、12.4cmが多い。e類は口径11.0cm(4図27)と12.2cm(4図19)の高台付環がみられる。f類は環が出土する。

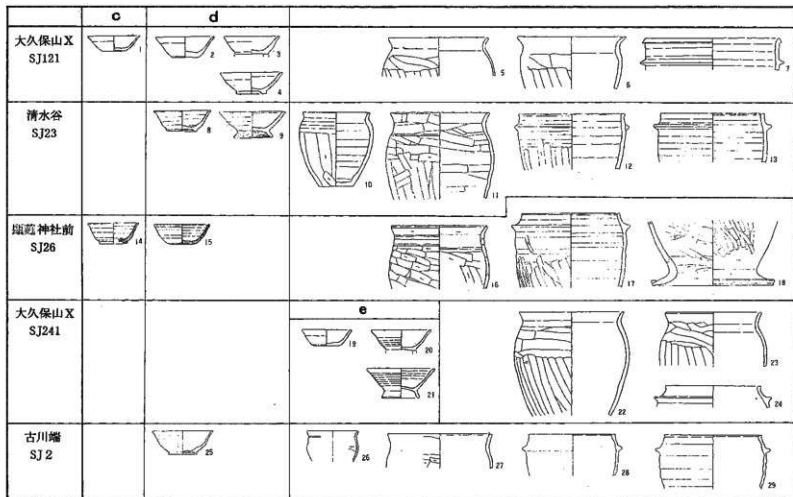
この群には、大原2号窯式の灰輪陶器が伴う(4図4・7・15・20)(註1)。煮炊具は北武蔵型甕と口縁部に特徴を持つロクロ成形の甕と羽釜である。ロクロ成形の甕の口縁部は胴部から外側に開きながら、一度屈曲した後直上し、さらに口縁端部がわずかに外側に開くという特徴的な形態をもつ(4図6・11・16・22・28)。この甕は器壁が薄く、酸火焼成だが硬質であり、色調は橙色で焼きムラや炭化物の付着が少ないものが多い。口径は19~27cmと幅があるが、20~22cmが多い。胴部下半を縦方向にヘラケズルする。羽釜は20~23cmの口径で、やはりロクロ成形している。胴部下半をヘラケズリしている点もロクロ成形の甕と同じである。北武蔵型甕は口径が21~24cmで小型台付甕は口径10cmである。口縁部の形態は強く外反するものと、ほとん



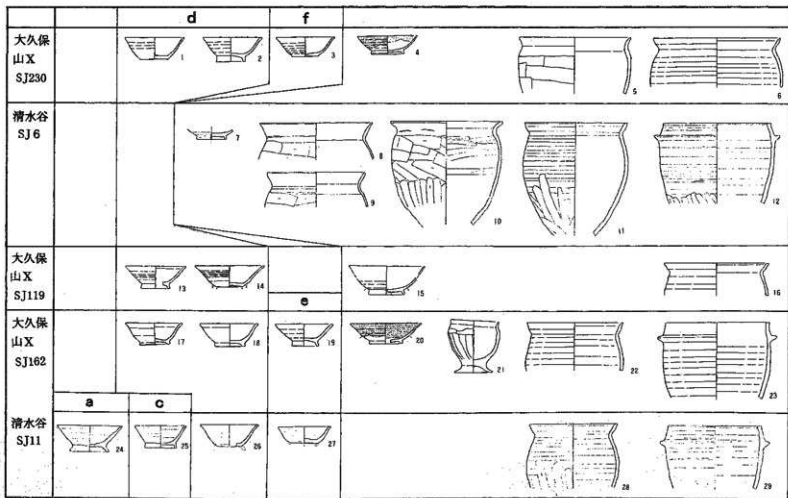


第2図 大久保山遺跡周辺地域 (1群)

S=1/8



第3図 大久保山遺跡周辺地域（II群）



第4图 大久保山遺跡周辺地域(Ⅲ群)

S=1/8

ど外反しないで上を向くものがある。

Ⅳ群の供膳具はd類とf類がみられる。d類は高台付坏のみである。5図1・2・9・15・16のような口径13~15.5cmの高台の低いタイプと、5図3・5のような14.5~15cmの高台の高いタイプがある。後者は深身で口縁端部の外反が強い。f類は坏(5図17)と高台付椀(5図18~20)がみられる。坏は11cm、高台付椀は15.5cmで内面にミガキが施されている。5図6・10は虎浜山1号窯式か東山72号窯式の灰釉陶器である。煮炊具は羽釜と羽釜形甕がある。羽釜は口径が21.5~22.5cm、26~27cmのロクロ成形したもの(5図4・7・11・13・14・21・23)と、口径22cm代で斜め方向か縦方向にヘラケズリを施したもの(5図12・22)の2種類がみられる。5図13・14・23は胴部下半から底部をヘラケズリしている。5図12は罎の直下から斜め方向にヘラケズリを施している。他の群より羽釜の口径が大きくなる。又、ロクロ成形とヘラケズリ整形の羽釜が共存している。5図8は胴部下半から底部が欠損しているが、口縁部の形態から羽釜形甕と考える。口径35.5cmと非常に大きい。ロクロ成形である。

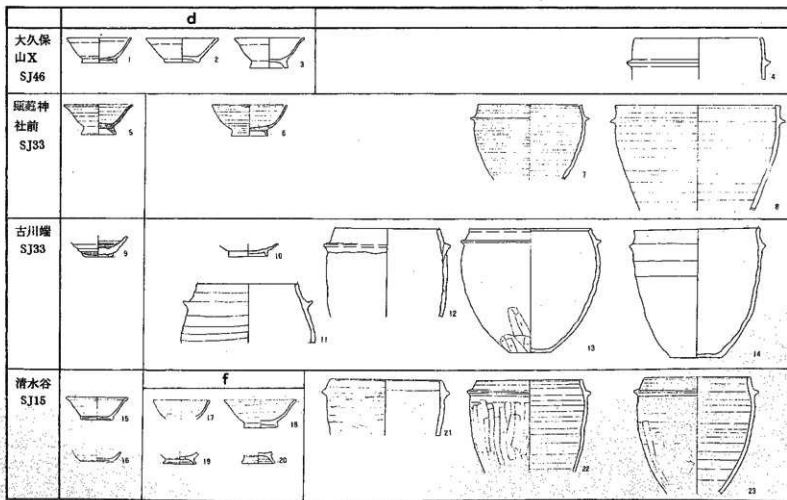
V群の供膳具はc・d・f類が出土している。c類は口径13.5cmの低い高台を持つ高台付坏(6図9)である。d類は10cm前半の坏(6図15・16)と13.5cmの高台付坏が出土している。6図1は高台が割かれているが高台付坏である。この群はd類に代わってf類が主体となる。口径10cm代の小皿(6図10・11・17~20)と13.2cmの高台が小さく内面黒色処理の施された高台付椀(6図13)と14~15cm代で口縁部が外反する高い高台を持つ高台付椀(6図2・6・7・12・21)がみられる。煮炊具は羽釜と口縁部が「くの字」状になる甕が見られる。この甕は器壁が厚く、断面が長方形の板を外側に「くの字」状に屈曲させたような口縁部を持ち、口縁端部の内側の角が甕高の最上部になるとい特徴がある(6図4・8・14・23)。口縁は20・24・27cmと3種類の大きさがある。羽釜はロクロ成形に胴部下半を縦方向にヘラケズリしている。口径22・26cmのものがある。20cmの甕には22cmの羽釜が、27cmの甕には26cmの羽釜がそれぞれ伴う。共存する供膳具も大小の差がみられる。

Ⅵ群の供膳具はf類のみである。口径9cm後半の小皿(7図1・5・9)と9.5cm・19cmの高台付椀(7図2・3)が出土している。高台付椀は内面を黒色処理しミガキを施している。

Ⅶ群の供膳具もf類のみである。小皿と高台付椀がみられるが、口径が更に小さくなっている。小皿(8図1・5)は9cm前半で、高台付椀(8図2)は15cmである。羽釜は器壁が厚くなり胴部が張っている。口径15.5cmの小さい羽釜が出土している。

大久保山X第37号住居跡からは、更に小さいf類の小皿(8図8・9)が出土している。口径8.5cm前後であり、最も小さい小皿である。この住居には、煮炊具は共存しなかったがⅧ群と似た。

I群からⅧ群まで設定したが、北武蔵型甕のみのI群がもっと古いこと、Ⅱ群とⅣ群は灰釉陶器からⅢ群が古くⅣ群が新しいことが分かった。又、Ⅳ群の供膳具をみると主体がd類からf類になる。このことから、f類が主体となるV群はⅣ群より新しいと考えられる。ではⅡ群はどこに位置付けられるのかというと、煮炊具に古い要素をもつ北武蔵型甕と新しい要素の羽釜が共存するという点からI群の直後と判断した。V群からⅧ群までは供膳具の主体を占めるf類の小皿の口径が小さくなるという富田氏や荒川氏の指摘からV群からⅧ群へ新しくなる。I群からⅧ群



第5图 大久保山遺跡周辺地域 (IV群)

S=1/8

は大まかに判断するとⅠからⅤへ新しくなっていくと考えられる(註2)。では、供膳具はⅣ群の前半までは、d類が主体的に出土している。そして、Ⅰ群からⅢ群はa～c・e類が少量づつではあるがみられる。しかし、Ⅳ群に入るとd類のみになり、後半にはd類は減少し、f類が主体となる。これはⅤ群になるとさらに顕著になる。この傾向はⅤ群まで継続する。

以上のように大久保山遺跡周辺では、Ⅰ群からⅤ群の特徴が非常に明瞭に現れた。これを元に他地域の土器を分類し、各地域の特徴を述べていく。

#### 【大寄遺跡周辺地域】

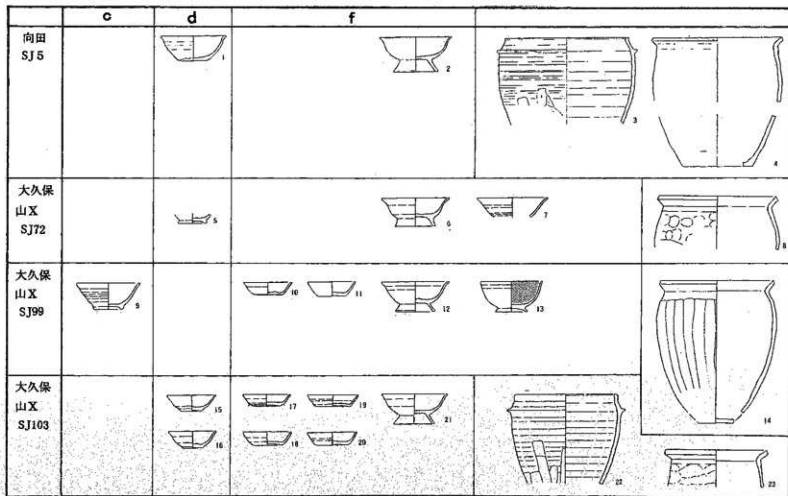
大寄遺跡と西浦北遺跡を挙げた(9～11図)。他には宮西遺跡などがある。遺跡は小山川と志戸川に挟まれた台地上に立地する。

第9図をみると、大寄遺跡周辺の煮炊具は、北武蔵型甕と羽釜が共伴しない。また、大久保山遺跡周辺Ⅲ群でみられた口縁部に特徴があるロクロ成形の甕は出土しない。大寄遺跡と大久保山遺跡はわずか2kmしか離れていない。しかし、ロクロ成形の羽釜の出現が遅れ、ロクロ成形の甕がないというように、大久保山遺跡の煮炊具とは大きく異なる。それでは、供膳具の方はどうか。厚手の北武蔵型甕だけが出土している。大寄Ⅱ第231号住居跡から大寄Ⅱ第186号住居跡までの供膳具をみると、a類は前段階から続く坏(9図1)から、高台付の大きめの碗(9図12・18)へ変化している。d類が後へ行くほど主体的になり、口径はより小さくなる。これは大久保山遺跡周辺のⅠ群からⅢ群への傾向と共通する。したがって、これらの住居は大久保山遺跡周辺Ⅰ群～Ⅲ群に併行すると考える。それをふまえた上で、異なる点を挙げてみる。大寄遺跡周辺はa・c・d類が出土しているが、c類が主体的な住居とd類が主体的な住居に分けられる。大久保山遺跡周辺では、Ⅰ群からⅢ群までd類が主体的であり、他類は客体的であった。次に、9図16は大原2号窯式の反軸陶器であるが、大寄遺跡周辺ではc類と共伴している。供膳具ではc類が多いということ、煮炊具の中心は北武蔵型甕であるということがこの地域のⅠ群～Ⅲ群の特徴と言えよう。c類は軟質ではあるが還元焼成であり、d類より須恵器に近いため、より古い要素を持っている。北武蔵型甕は前段階まで煮炊具の中心的存在であり、やはり古いものである。大寄遺跡周辺は古い要素が残る地域と言える。

このように、10世紀に入ると、近隣する遺跡間でも土器の様相は一様ではなくなってくる。しかし、地域間の共通点と異なる点を整理していくと、共通点は時期的な特徴であり、異なる点はその地域の特徴であると考えられる。

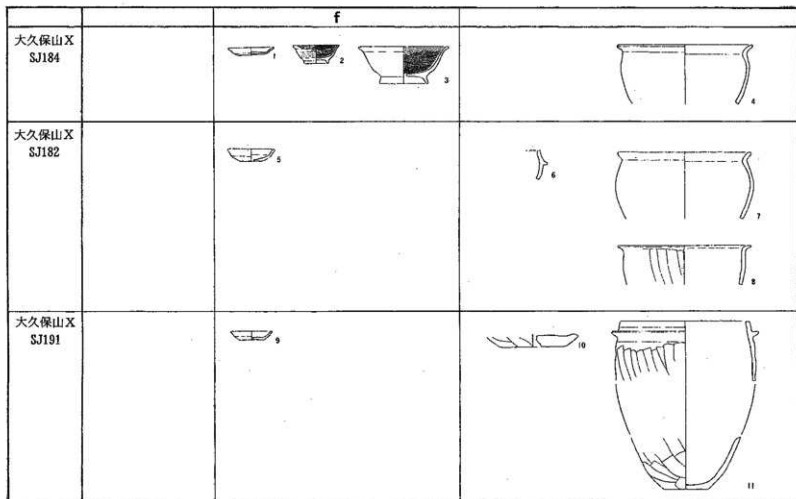
西浦北第62号住居跡は羽釜と羽釜形甕が共伴する住居である。これは大久保山遺跡周辺Ⅳ群と併行する。供膳具をみると、c類の坏は10.8cmの小ぶりである。d類が主体的であり、11cm前後と14cm代が見られる。d類主体で、他類の土器がほとんどみられない点も大久保山遺跡周辺と共通する。羽釜はロクロ成形で口径が20cmである。9図34は底部がないがロクロ成形の羽釜形甕であり、口径29cmである。両者とも大久保山遺跡周辺Ⅳ群のものより小さい。Ⅳ群はほぼ共通する。

大寄ⅡⅡ区第81号住居跡はロクロ成形の羽釜と長方形の板を外側に「くの字」状に屈曲させたような口縁部を持ち、口縁端部の内側の角が器高の最上部になる甕が共伴している。この甕は大久保山遺跡周辺Ⅴ群にみられる甕である。また、大久保山遺跡周辺もロクロ成形の羽釜が共伴す



第6図 大久保山遺跡周辺地域 (V群)


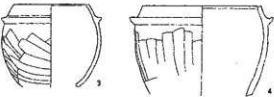

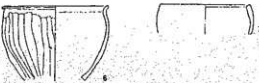

S=1/8



第7图 大久保山遺跡周辺地域 (VI群)

S=1/8



Ⅶ		f	
大久保山X SJ166			
大久保山X SJ190			
Ⅷ			
大久保山X SJ37			

第8圖 大久保山遺跡周辺地域 (Ⅶ・Ⅷ群)

S=1/8

る。このことから81号住居跡をV群併行とする。次に大寄Ⅰ第131号住居跡の10図33の甕は大久保山X第99号住居跡6図14の甕と同じである。更に大寄Ⅰ第176号住居跡の10図26の甕と大寄Ⅱ第145号住居跡の10図12の甕は口縁端部の形態がやや異なるが、口径が26cm以上と大きく、胴部を縦にヘラケズリすることから、同群と判断しV群にした。第145号住居跡はこの甕にロクロ成形の羽釜（10図10）とロクロを用いず、胴部を縦にヘラケズリする羽釜（10図11）が共存する。10図11の羽釜は次群に主体的になる羽釜である。この羽釜がロクロ成形の羽釜と共存していることや、10図12の甕の小ぶりのものがやはり次群でみられることは、この住居跡がV群でも後半で次群への過渡的な様子を現していると言える。

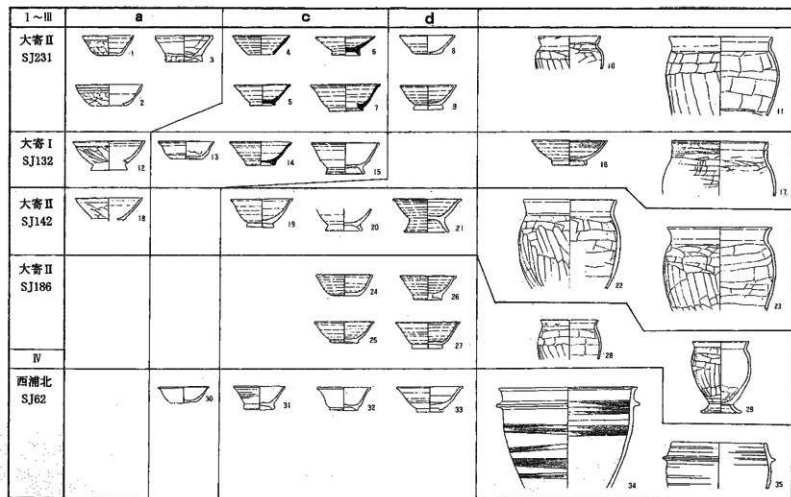
供膳具はf類が主体的である。それまで多くみられていたd類は全くなく、e類が少量共存する。大久保山遺跡周辺でもこの群からf類が中心的な位置を占めている。しかし、大久保山遺跡周辺はc・d類が残っている。f類は小皿と高台付椀がみられる。小皿の口径は10cm代である。高台付椀は黒色処理とミガキが施されているものとされていないものがある。第81号住居跡の10図2は内外面に黒色処理とミガキが施されている。

次に大寄Ⅱ第156号住居跡、大寄ⅠⅡ区第97・122号住居跡をみる。煮炊具は胴部を縦にヘラケズリした羽釜と甕が共存している。甕は口縁部を外側に「くの字」状に屈曲させて、口縁端部の内側の角が器高の最上部になるものである（11図7・14・21）。羽釜は前群はロクロ成形が中心だが、この群は胴部ヘラケズリが中心である。大久保山VI群と併行である。羽釜の口径は25cm前後で、甕は20cm前後である。供膳具はf類のみである。小皿・椀・高台付椀が出土し高台付椀には内面黒色処理とミガキが施されている。小皿の口径は9cm代である。

大寄ⅠⅡ区第56号住居跡、大寄Ⅰ第171号住居跡の煮炊具は、胴部をヘラケズリする羽釜が出土している。中にはケズリが鈔の直下からではなく、やや下から始まるような羽釜もみられる。更にこの群の羽釜の特徴としては、器壁が非常に厚くなる点が挙げられる。11図17・19は鈔も分厚い。大久保山VII群併行と考える。供膳具はf類の小皿と高台付椀であり、前群と同じである。しかし、小皿の口径は8cm代のものがみられるようになる。大寄遺跡周辺はVII群は確認できなかった。

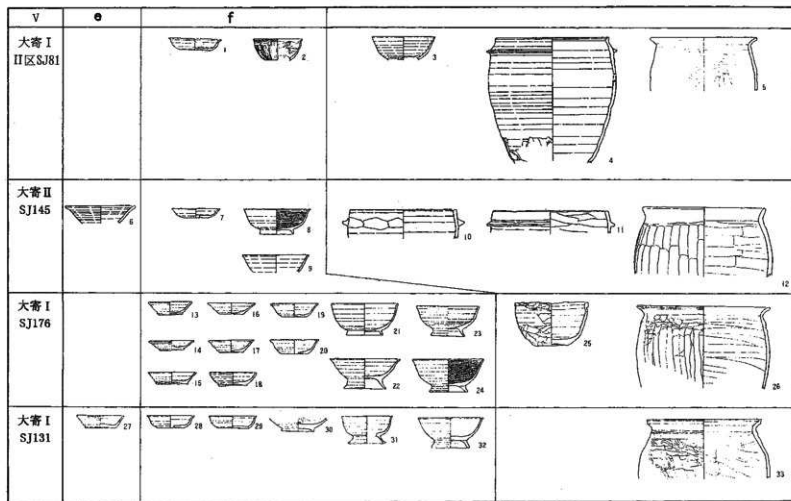
大寄遺跡周辺のV群～VII群は、大久保山遺跡周辺のそれと共通するところが多かった。

ここで、大寄遺跡の編年について、若干触れる。「大寄遺跡Ⅰ」では富田氏が10世紀以降の土器の編年案を示している（富田2000）。ロクロ土器小皿の形態分類と器形の縮小化に焦点を当て、A～E期の5期に区分している。しかし翌年の『大寄遺跡Ⅱ』で筆者がまとめた大寄遺跡の土器編年はA期をXⅢ期に、B～E期をXⅣ期にまとめてしまった（永井2002）。筆者の認識不足からなる誤った編年を設定してしまったことに、深く反省し現在では富田編年を大筋で指示している。したがって今回は富田編年を参考にV群からVII群を設定した。V群はB期に、VI群はC期、VII群はD・E期に相当する。しかし、富田編年と異なる所をいくつか挙げる。まず実年代であるが、大寄遺跡だけでなく、今回検討する他地域の上層群とも関係するので後ほど述べたい。他には細かい点だが、大寄Ⅰ第131号住居跡は富田編年ではC期になる。しかし供膳具にe類があり、f類の小皿が10cmで、甕の口径がC期に相当するVI期の甕より大きいことから、B期であるV群に入れた。



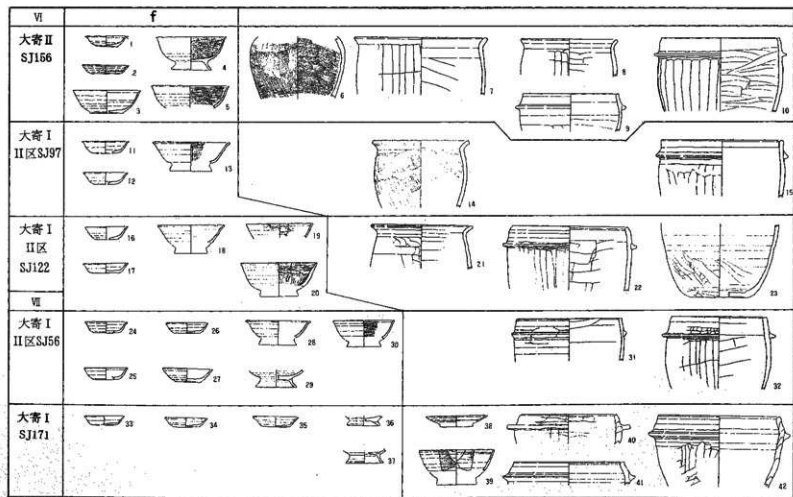
第9図 大寄遺跡周辺地域(1)

S=1/8



第10图 大寄遺跡周辺地域 (2)

S=1/8



第11图 大寄遺跡周辺地域 (3)

S=1/8

また大寄ⅠⅡ区第122号住居跡富田編年ではE期であるが、C期のⅡ期第97号住居跡の煮炊具と同じであることから、C期に相当するⅥ群に含めた。最後に、大寄ⅠⅡ区第56号住居跡、大寄Ⅰ第171号住居跡は、それぞれD・E期に位置づけられている。f類の小皿の口径と煮炊具が器壁の厚いヘラケズリの羽釜のみであることから、Ⅶ群とした。

最後に簡単に地域の特徴をまとめると、大寄遺跡周辺地域ではⅠ～Ⅲ群は、器壁の厚くなった北武蔵型甕が煮炊具の主体をなし、供膳具はa・c類からd類が多くなっている。それがⅣ群になると、ロクロ成形の羽釜とd類になり、Ⅴ群はロクロ成形の羽釜と板状の口縁部が「くの字」屈曲する甕が共伴し、供膳具はf類になる。Ⅴ群以降の供膳具はf類である。Ⅵ群の煮炊具は胴部を縦にヘラケズリする羽釜と前群の甕が口径を小さくするか、あまり屈曲しないものになる。Ⅶ群はヘラケズリの羽釜が分厚くなり、つくりが雑になる。

#### 【熊野遺跡周辺地域】

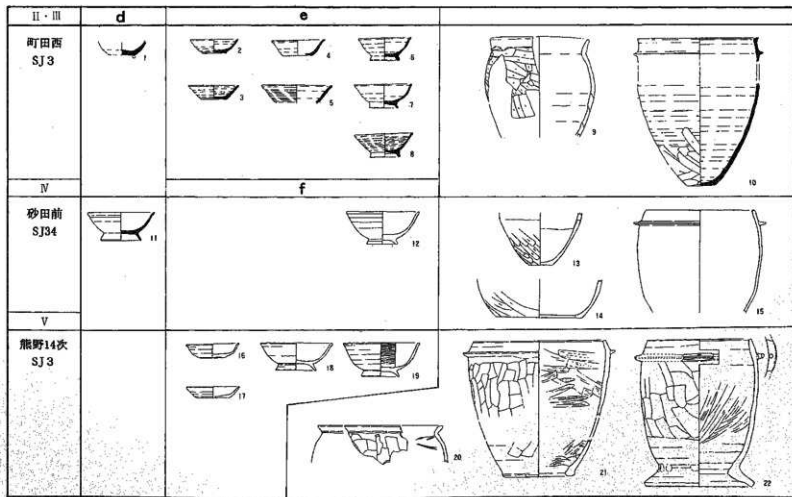
榑引台地が妻沼低地と接する台地北端の中宿・熊野遺跡と妻沼低地西部の砂田前・町田西遺跡が挙げられる(12・13図)。町田西第3号住居跡は北武蔵型甕とロクロ成形の羽釜が共伴することから、大久保山遺跡周辺Ⅱ群と併行する。しかし、供膳具はa～c類はなく、d・e類のみみられる。特にe類が主体的である。砂田前第34号住居跡の煮炊具は12図13の甕を混入と判断し、羽釜のみと考えⅣ群とした。12図15の羽釜は縦にヘラケズリを施す。供膳具はd・f類が共伴している。12図12は内面にミガキが施されている。これは、大久保山遺跡周辺で挙げた清水谷第15号住居跡と同じである。熊野14次第3号住居跡は羽釜と器壁が分厚く口縁部が「くの字」屈曲する甕が共伴する。熊野52次第5号住居跡はこの甕が出土している。このためⅤ群とする。中宿第3号住居跡と熊野52次第2号住居跡は羽釜のみが出土しているため、煮炊具はⅥ群だが、供膳具をみると、すべてf類で10cm代の小皿がみられることから、Ⅴ群に含めた。羽釜は縦にヘラケズリしたものが多い。f類は小皿と高台付椀が出土している。高台付椀には内面黒色処理にミガキを施したものと、そうでないものがある。Ⅰ・Ⅲ・Ⅵ～Ⅷ群は確認できなかった。この地域は、Ⅱ・Ⅳ群は低地でⅤ群は台地上に立地する。9世紀後半までは台地上に集落は営まれているが、10世紀以降の動きとしては、低地から台地への移行がみられる。

#### 【本郷前東遺跡周辺地域】

町田西遺跡や砂田前遺跡から東に約5kmの所に本郷前東遺跡・新屋敷東遺跡・上敷免北遺跡・砂田遺跡・居立遺跡・血沼西遺跡がある(14・15図)。町田西・砂田前と同じ榑引台地の北端に接する妻沼低地に立地している。

新屋敷東第145・146・148号住居跡からは、分厚い北武蔵型甕のみが出土している。Ⅰ群とする。供膳具はa～d類が出土している。本郷前東第4号住居跡は煮炊具は出土していないが、供膳具a～d類がみられることから、Ⅰ群に含めた。a類は前段階から続く坏に加えて、小さな高台を貼り付けた高台付坏(14図2・3・7・8)がみられる。これまでの他地域よりb類の出土量が多い。c・d類は高台付坏である。高台の低いタイプが多く高いものはわずかである。主体がa・b類からc・d類へと変化している。

砂田第18号井戸跡は北武蔵型甕とロクロ成形の羽釜形甕が共伴している。これは大久保山遺跡



第12図 熊野遺跡周辺地域(1)

S=1/8

周辺Ⅱ群と同じである。したがって、この井戸跡はⅡ群と考える。次に居立第66号住居跡の15  
図3は砂田の羽釜形態(14図32)と口縁部の形態が同じなので、同群とした。これらの遺構の  
供膳具はe類がほとんどである。居立第44号住居跡は煮炊具がない。また皿沼西第3号住居跡は  
北武蔵型の甕のみが出土している。しかし、供膳具はe類が出土していることからⅡ群に含める。

上敷免北3次第2号住居跡は羽釜が出土しているため、Ⅳ群にした。Ⅱ群と同じく、やはりe  
類が主体的に見られる。この住居から出土する供膳具は他の住居ではみられない、非常に特異な  
あり方をみせている。まず、出土量の多さである。e類の坏・高台付坏が60点近く出土している。  
そして、そのほとんどが同じ胎土と焼成である。また、口径が坏で10.5・11.2・11.5・12cm、  
高台付坏で12・13・13.5cmと細かく分けられている。そして、全ての坏は2種類の形態に分け  
ることが出来る。第15図12~17は外面はロクロ目がはっきりしていて、内面は底部と体部に境  
が見られないタイプである。15図18~24は外面のロクロ目は口縁部と体部の境にみえるだけで、  
内面は底部と体部の境がはっきりしているタイプである。前者はロクロの回転を多用し、後者は  
円盤状の底部に粘土紐を積んでから、ロクロを使用していると思われる。手法の違いが形態差と  
なって、現れている。このように上敷免北3次第2号住居跡出土の供膳具は大量に出土している  
にもかかわらず、胎土・焼成・形態に規格性が高く、かつ分量分化がみられる。そして2種類の  
手法によって作られている。これらの土器はこの住居で使用するためではなく、ここに一時的に  
集積していたと考えられる。また胎土的にはこの地域のものであることから(註3)、この近隣  
で生産され、この住居に仮置きされていたのではないだろうか。この住居からは灰軸陶器も出土  
している。15図27は大原2号窯式だが、15図28・29は田中氏によると、東山72号窯式段階と  
されている(田中2001)。大久保山遺跡周辺のⅣ群からも東山72号窯式段階の灰軸陶器が出土し  
ていることから、この住居がⅣ群であると判断できる。

居立遺跡第67号住居跡からはロクロ成形の羽釜が出土している。供膳具はf類の高台付碗が多  
くみられることから、Ⅴ群にした。高い高台と低い高台の両方がみられる。

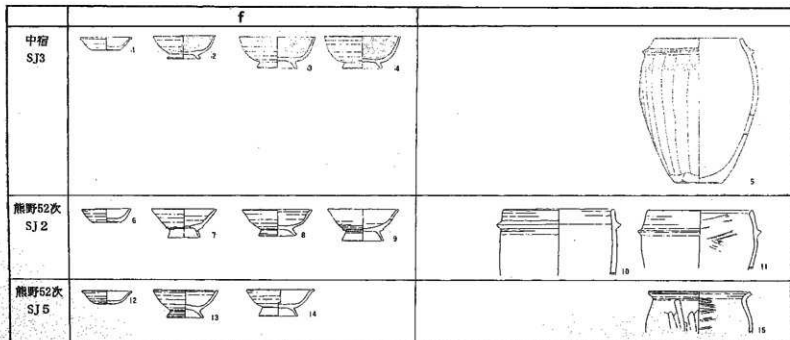
Ⅲ群とⅥ~Ⅷ群は確認できなかった。これは熊野遺跡周辺と共通する。しかし、この地域はⅣ  
群までが多く出土し、Ⅴ群は少量しかみられなかった。熊野遺跡周辺は逆にⅤ群が多くみられる。  
地域内の分布は、Ⅰ群の遺跡を中心に他群の遺跡はその周辺に散っている。

#### 【金佐奈遺跡周辺地域】

金佐奈遺跡と十二天遺跡を取りあげた(16・17図)。これらの遺跡の所在する児玉地域にはこ  
の時期の遺跡が複数確認されている。阿知越遺跡、雷電下遺跡、真鏡寺後遺跡、天田遺跡、大久  
保遺跡、枇杷橋遺跡が挙げられる。

金佐奈Ⅱ第69号住居跡はロクロ成形の羽釜が出土している。羽釜のみが出土しているため、Ⅳ  
群という可能性はあるが、羽釜の口径が26cmと大きめのものがあることや、高台付坏がやはり大  
きめであることから、甕は伴わないがⅡ群とする。金佐奈Ⅱ第115号住居跡と十二天第12号住居  
跡は煮炊具が出土していないが、供膳具はc・d類のみで構成されていることから、Ⅱ群に含め  
る。高台付坏には高台がひくいものと高いもの両方がある。低いものの口径は11~12cm代で、  
高い方は14~15cmと大小に分かれる。





S=1/8

第13図 熊野遍跡周辺地域(2)

十二天第7・11号住居跡は北武蔵型甕と薄手で口縁部に特徴をもつロクロ成形の甕とロクロ成形の羽釜が共存している。小型台付甕も出土している。これは大久保山遺跡周辺Ⅲ群と同じである。供膳具はd・e類が出土している。口径はやはり11～12cm代と14cmの高台付坏に分かれるが、前段階よりも小ぶりで、14cmの高台付坏の高台は低くなっている。

十二天第3b号住居跡は羽釜が主体的に出土している。ロクロ成形の羽釜で口径が24cmとⅡ群より小さい。Ⅳ群とする。金佐奈第18号住居跡・十二天第16号住居跡は煮炊具が出土していない。17図17は器種不明である。供膳具をみると、第18号住居跡の口径11.5cmのd類の高台付坏や、第16号住居跡の口径11cmのe類の坏が、十二天第3b号住居跡のものに近いことから、Ⅳ期に含めた。Ⅳ群の供膳具はc～f類がみられる。d・e類が中心の住居とそれにf類が加わる住居がある。

金佐奈Ⅱ第107・71号住居跡はロクロ成形の羽釜と、器壁が厚く口縁部が「くの字」に屈曲する甕が共存するためⅤ群にした。甕はロクロ成形のものと同様にヘラケズリするものがある。供膳具はd・f類が見られる。d類は大小の高台付坏があるが量は少ない。f類が主体的に出土している。小皿は9～10cm、高台付坏は高台が低く、口径が小さいものと高台が高く口径13～14cmのものがある。高台付柄は13～16cmと18cmである。内面に黒色処理とミガキが施されている。

今回はⅠ群とⅥ群以降は良い資料が抽出できなかつたため、検討できなかった。しかし、この地域にはこれらの群は確実に存在する。今後更に検討する必要性が高い。この地域の特徴としては、煮炊具はロクロ成形の羽釜が主体的であり、武蔵型甕はみられない。これまで大久保山遺跡周辺でしかみられなかつた薄手で口縁部に特徴を持つロクロ成形の甕がこの地域で出土している。このためⅢ群がみられる。供膳具はc～f類があり、a・b類はみられない。Ⅱ群はc・d類が主体的である。Ⅲ群になると坏・高台付坏の口径が小さくなる。c類がなくなり、代わってe類がみられるようになる。Ⅳ群の後半になると、d・e類にf類が共存する。Ⅴ群はf類のみである。

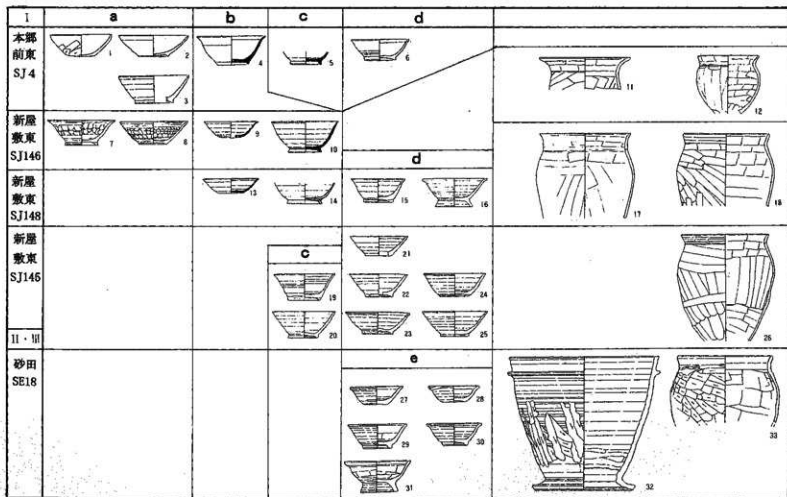
#### 【中壙遺跡周辺地域】

中壙遺跡周辺は中壙遺跡と田中前遺跡があげられる(18～20図)。本庄台地の北部に位置する。

中壙第20号住居跡は北武蔵型甕と羽釜が共存している。供膳具はa～d・f類が出土している。甕やa類の坏が前段階の要素を強く持っていることからⅠ群と判断した。c類が多くみられる。坏と高台付坏である。高台付坏は高台が低く口径の小さいタイプ(18図10)と、口径が大きく高台が高いタイプ(18図11・12)がある。d類も同じである。f類がⅠ群からみられるのは、この地域だけである。

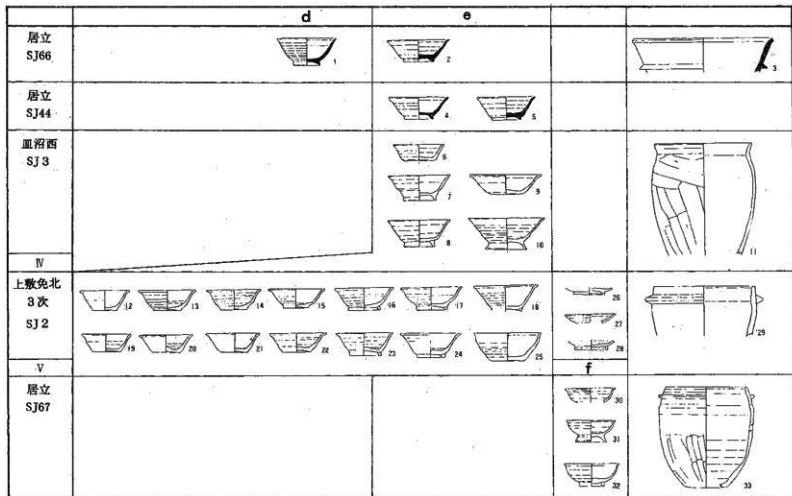
中壙第59号住居跡は羽釜と羽釜形甕が出土している。どちらもロクロ成形である。他にロクロ成形の小型甕が伴う。Ⅱ群にした。供膳具はc・d類だけになる。高台付坏がほとんどである。高台の高いものと低いものがあるが、高台の高いタイプは口径が大きい。

中壙第54号住居跡はロクロ成形の羽釜と、小型だが薄手で口縁に特徴があるロクロ成形の甕(18図45)が共存するため、Ⅲ群にする。18図43・44の灰釉陶器は虎溪山1号窯式期以降のものであり、この住居に伴わない可能性がある。供膳具はa・c～f類が出土している。a類の坏はⅠ群より口径と底径が小さい。c・d類が多いがc類の割合は前群より少なくなっている。この群からe類がみられる。

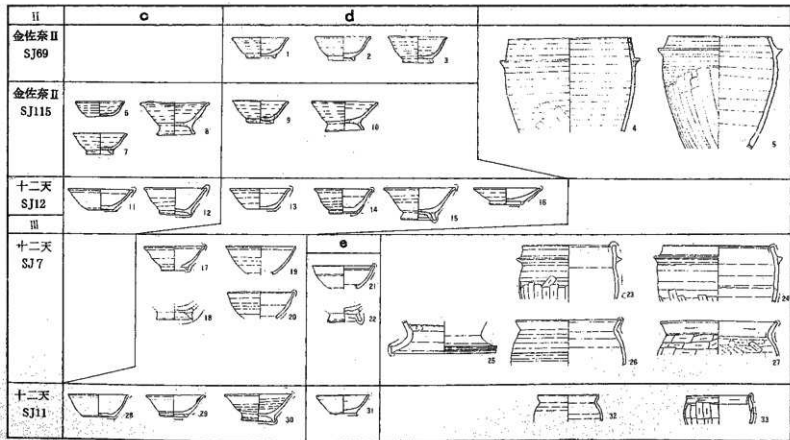


第14図 本郷前東道跡周辺地域(1)

S=1/8

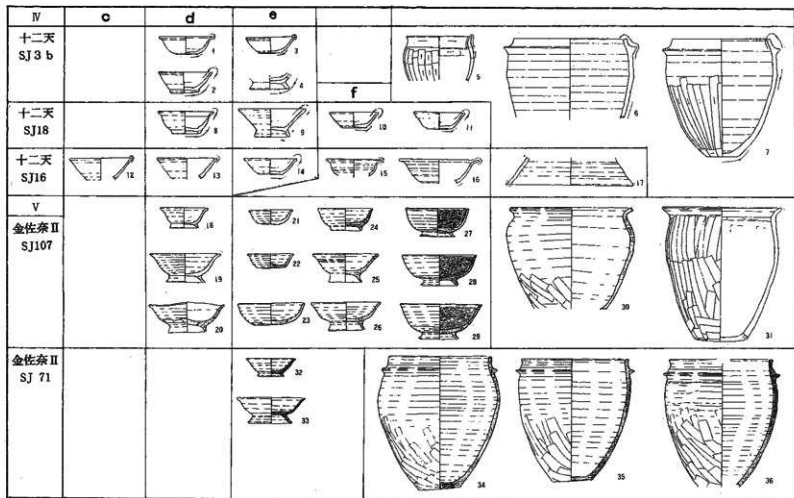


第15图 本郷前東濠跡周辺地域 (2)

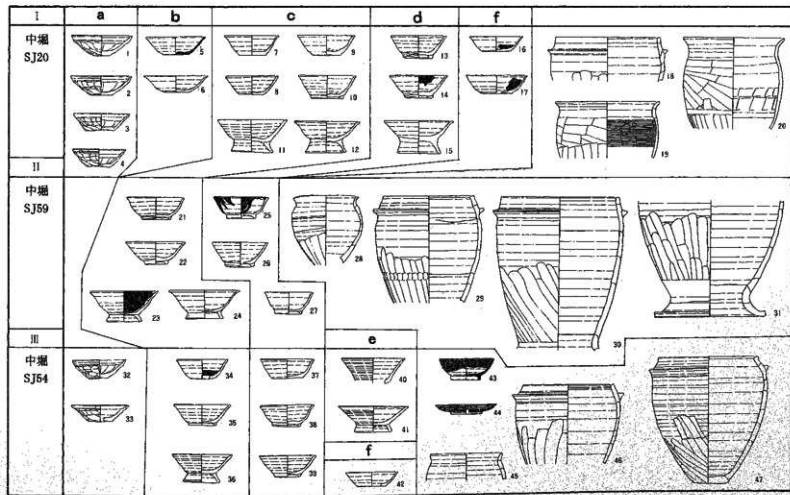


S=1/8

第16圖 金佐奈遺跡周辺地域(1)



第17图 金佐奈遺跡周辺地域 (2)



第18圖 中壩遺跡附近地域 (1)

中堀10号住居跡の煮炊具は羽釜と甕が共存しているが、供膳具はa～c類がなくなり、d～f類が出土していることから、IV群と判断した。e類が多くみられる。高台付坏がほとんどで、高台の低いもの高いものがある。

田中前第13・5・6・15号住居跡はロクロ成形の羽釜と口縁部が「くの字」に屈曲する甕が共存する。甕はロクロ成形のものと同部を縦にヘラケズリするものがある。また、口縁部の屈曲が弱いものが多いが、19図36のように極端に屈曲するものもみられる（註4）。供膳具はd～f類が出土する。田中前第6号住居跡の19図32～34は「ての字状口縁」皿である。この土器は京都系の「ての子」皿を模倣したものであり、10世紀第3四半期後葉とされている。田中前9号住居跡はe類の坏が10.8cm、f類の小皿が9.6～10.6cmであることから、V群に含めた。

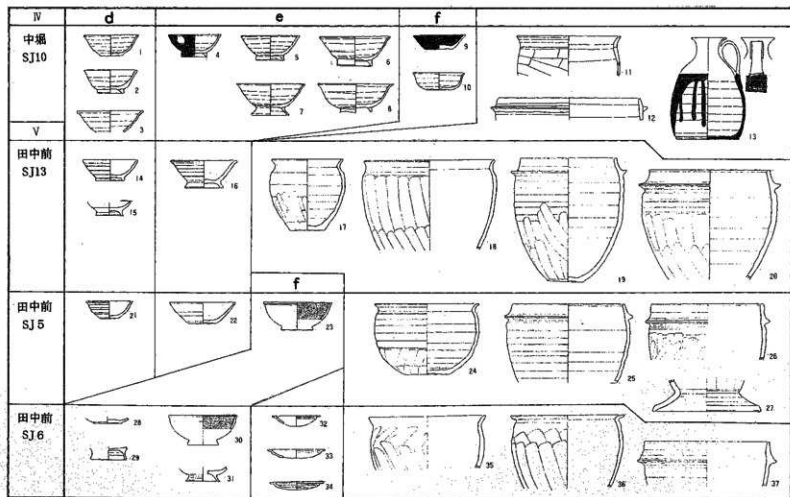
田中前10号住居跡は、ロクロ成形の羽釜が出土している。供膳具は9.8cmと小さくなったe類の小皿やf類がみられる他、ロクロを用いないa類の小皿（20図12～14）が出土する。a類といってもそれ以前に出土しているa類とは全く異なるものである。e類の小皿からVI群と判断した。

I群からIII群までは、a類～f類までバラエティに富んでいるが、IV群とV群の前半はd～f類がみられる。V群後半からVI群はe類とf類、そして「ての字状」皿やそれ以前のa類とは全く異なるタイプのa類が出土する。地域的にはIV期までは中堀遺跡、それ以降は田中前遺跡というように、集落の営まれていた時期がはっきりしている。煮炊具のセット関係は大久保山遺跡周辺と同じようにはいかなかった。ロクロ成形の羽釜が主体的であるが、V期の要類は他地域にはみられない。

#### 4. まとめ

供膳具をa～f類までの6種類に分類し、遺構ごとに煮炊具を基準に群を設定、その特徴を地域ごとにみてきた。前稿では、土師器・須恵器A・須恵器B・須恵系土師質土器・土師系土師質土器・ロクロ土師器という名称をつけた。しかし、今回大寄遺跡出土以外の遺物を検討した結果、訂正したい点が2つある。まず須恵器Bは須恵器Aと須恵系土師質土器のどちらかに分けられる。須恵器Bがなくなるので、須恵器Aは須恵器とする。次に土師系土師質土器は、みられなかった。大寄遺跡でも1点しか出土していないので、この土器の設定には無理があることが分かった。したがって10世紀以降の土器の種類としては、土師器・須恵器・須恵系土師質土器・ロクロ土師器の4種類が挙げられる。では、各類の種類について述べていきたい。a類は土師器である。I群の土師器は口径が小さくなるが、形態や作り方が前段階までの土師器と同じである。II・III群になると、口径や器高が大きくなり高台が付くようになる。形態が須恵器に似てくる。b類は須恵器である。I群しかみられない。この群で須恵器は消滅する。c～e類は須恵系土師質土器である。これら3類は焼成や作りの丁寧さが異なるが、形態的に共通する。また各類の中での個体差が激しいという点も3類は似ている。またI～IV群にみられるというあり方も同じである。d・e類は酸火焼成なので土師質土器と呼べるが、c類は還元焼成なので土師質土器とは呼べないという考え方もあるであろう。しかし、須恵器にも還元焼成でないものは存在する。酸火焼成だからといってこれらの土器を須恵器でないとは言えない。したがって、c類は須恵系土師質土器に含まれる。f類はロクロ土師器である。IV群の後半から見え始め、V群以降の供膳具はほとんどロクロ土師器になる。





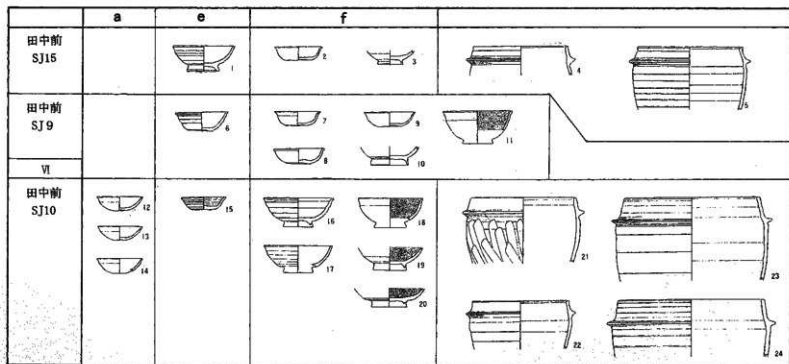
第19图 中堀遺跡周辺地域 (2)

S=1/8

次に、須恵系土師質土器の生産地について述べると、寄居町折原石道遺跡や川本町の如意遺跡が挙げられる。折原石道遺跡からは、土器焼成坑が検出され、ロクロを使用した酸火焼成の土器や還元焼成の土器が出土している（利根川1999）。酸火焼成の土器はd類に、還元焼成はc類に分類できる。この遺跡は末野窯跡群の外縁部にあたり、須恵器工人との関連性は高い。如意遺跡からは、窯跡が検出された（山本2001）。この窯は長さ2.27mと小さく、灰層がない。出土した遺物は少量でc類である。これらのことから、この窯は前段階の須恵器を焼成したのではなく、須恵系土師質土器を焼成したものであると考えた。他には実見してはいないが、寄居町の折原窯跡が挙げられる。「大里地域の遺跡Ⅱ」の資料紹介を参照すると、窯跡が2基検出されているが、これらの窯も長さ2.8mと3.3mであり、小規模である（大里郡市1993）。出土遺物は「土器は還元状態のもの、酸火状態のもの」との記述があり、須恵系土師質土器を焼成した窯であると判断した。やはりc類とd類が共存していると思われる（註5）。須恵系土師質土器は焼成坑と小規模な窯跡の両方で生産される。そして、一つの生産遺構の中で酸火焼成と還元焼成がみられる。これは須恵器を生産した登窯よりも、構造的に劣っているためである。逆に言えば、この土器を製作した人々は還元焼成にこだわらないと考えられる。そして、そこでの生産は単発的であり、出土する土器は少量である。さらに、土器の個体差が激しく、企画性に乏しい。これらのことから、それまでの須恵器とは全く異なり、生産体制自体が異なっているということになる（註6）。

次に須恵系土師質土器の時期について検討する。まず各群の具体的な年代について述べると、大久保山遺跡周辺地域のⅢ群では、大原2号窯式の灰釉陶器が出土している。そして、Ⅳ群からは虎渓山1号窯式が出土している。現在では大原2号窯式は10世紀前半に、虎渓山1号窯式は10世紀後半に位置付けられている（斉藤1995）。そこでⅢ群を10世紀第2四半期に、Ⅳ群を10世紀第3四半期と考える。Ⅰ群は北武蔵型変が共存するため、9世紀末～10世紀初頭とする。Ⅱ群はその間なので10世紀第1四半期で、Ⅴ群は田中前遺跡のての字状口縁の皿から10世紀第3四半期後葉～第4四半期とする。Ⅵ群～Ⅷ群は大久保山遺跡の編年を参考に、11世紀前葉、中葉、後葉とした。

須恵系土師質土器は大久保山周辺地域と大寄遺跡周辺地域ではⅠ群～Ⅴ群までにみられる。熊野遺跡周辺地域はⅡ～Ⅳ群に、本郷前東遺跡周辺はⅠ群～Ⅳ群、金佐奈遺跡周辺地域はⅡ群～Ⅴ群に、中堀遺跡周辺地域はⅠ群～Ⅵ群にそれぞれ出土している。どの地域もⅡ群～Ⅳ群には須恵系土師質土器が主体的である。つまり、須恵系土師質土器は10世紀前半～第3四半期に供具の主体的な位置を占めていた。その後、10世紀の第4四半期になるとロクロ土師器が主体的になり、それは11世紀まで続く。須恵系土師質土器が作られはじめる10世紀前半は、須恵器生産体制が解体する時期である。一部の須恵器工人達は折原石道遺跡のように焼成坑を用いて酸火焼成の土器をつくり、別の工人達は、如意遺跡のように平地で小規模な窯を作り、還元焼成だが歌賀の土器を作っていたと考えられる。このようにロクロを使用するという須恵器製作の技術が、須恵器の生産体制が解体することによって、各地域に広まり各地で須恵系土師質土器が作られるようになる。それはそれまでの土師器生産を消滅させた。今回分類したc～e類は胎土・焼成・作りの良悪は異なるが、土器が作られた背景は以上のように同じであるため、これらを須恵系土師質土器とする。



S=1/8

第20圖 中堀遺跡周辺地域 (3)

最後に、須恵系土師質土器とロクロ土師器の違いについて触れたい。ロクロ土師器はV群(10世紀第3四半期後葉)から、須恵系土師質土器に代わって主体的にみられるようになる。ロクロ土師器は、須恵系土師質土器のように個体差が激しくなく、また胎上の違いは若干あるが地域差はあまりない。どの地域も小皿・高台付椀・内面黒色処理とミガキを施した高台付椀で構成されている。酸火焼成であるが、硬質であり作りは丁寧である。埼玉県北部では確実にロクロ土師器を焼成した遺構はまだ確認されていないので確かなことは不明だが、須恵系土師質土器ほど各地で個別に作られていたのではなく、ある一定の共通認識があつて製作されていたと考えられる。専門的な製作集団の存在を現時点で言及することは難しいが、少なくとも須恵系土師質土器が作られていた状況とは異なる体制で作られていたと考えられる。

## おわりに

10世紀以降の土器をa~f類に分類し、埼玉県北部を6地域に分け、地域ごとに検討してきた。そして、その種類を土師器・須恵器・須恵系土師質土器・ロクロ土師器の4つに分けて、ロクロ使用の酸火焼成の上器は須恵系土師質土器とロクロ土師器に区別出来るとした。これらは、その製作された時期や背景まで異なるものである。須恵系土師質土器は須恵器生産体制が解体した直後に、その影響を受けて、各地域で個別に生産された土器である。一方ロクロ土師器はその須恵系土師質土器が主体的に生産されていた時期より後に生産された土器であり、平安時代の終わりまで継続して作られるものである。10世紀前半に須恵器・土師器生産から須恵系土師質土器生産へ、10世紀後半に須恵系土師質土器からロクロ土師器へと、10世紀の土器生産には2つの大きな画期がある。

最後に、今回分類した供膳具は全て実見して分類した。これは報告書の図や観察表をみるだけでは、判断しきれないためである。今後これらの土器を実見せず分類するためには、「大久保山X」のようにカラー写真を掲載するか、デジタルアーカイブ化などの方法が有効的であると思われる。

本稿を執筆するにあたり、以下の方々のご指導・ご協力を頂きました。また資料の実見に際し、各関係機関の方々にも多大なご協力をしていただきました。末筆ながら、記して感謝申し上げます。(敬称略)

青木克尚 赤熊浩一 荒川正夫 新屋雅明 上野真由美 大原道則 古池晋祿 鈴木徳雄  
田中広明 知久裕昭 富田和夫 鳥羽政之 兵ゆり子 松澤浩一 松本美佐子 宮本直樹

## 註

- 註1 灰釉陶器の窯式は大久保山遺跡は荒川正夫氏の、それ以外は田中広明氏の「関東地方の施釉陶器の流通と古代の社会(2)」による。
- 註2 大まかとしたのは一部の群は新旧関係ではなく、併行関係にある可能性が考えられるためである。例えばII・III群は同時期に存在していたとも想定出来る。

註3 青木克尚氏のご教示による。

註4 この土師器甕は報告書では第8号住居跡出土となっていたが、実見の際注記を見たところ、第6号住居跡出土であることが判明した。

註5 富田和夫・鳥羽政之両氏から、この窯跡が10世紀前半の土師質土器を理解するために鍵になる遺構であるとの御指摘を受けた。

註6 上巻免北遺跡3次第2号住居跡出土の上器は多量であり、企画性が高い。このためe類の須恵系土師質土器を生産していた集団の中には、ある程度の専門性が認められる集団の存在が考えられる。

## 引用・参考文献

- 青木克尚・知久裕昭 2000 『墨沼西／極南』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第62集
- 浅野晴樹 1986 『北武蔵』『神奈川考古—古代末期から中世における在来土器の諸問題—』21号 神奈川考古同人会
- 荒川正夫 1999 『大久保山Ⅴ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告書7 早稲田大学本庄文化財調査室
- 荒川正夫 2001 『大久保山Ⅹ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告書10 早稲田大学本庄考古資料館
- 市川 修 1977 『山中前遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第32集
- 岩瀬 譲 1991 『樋詰・砂田前』埼玉県埋蔵文化財調査事業同報告書第102集
- 岩瀬 譲 1995 『前・屈立』埼玉県埋蔵文化財調査事業同報告書第151集
- 大里郡市文化財担当者会 1992 『大里地域の遺跡Ⅰ』埼玉考古学会第29号
- 大里郡市文化財担当者会 1993 『大里地域の遺跡Ⅱ』埼玉考古学会第30号
- 太田博之 2002 『東五十子・川原町』東五十子遺跡調査会
- 柿沼幹夫・小久保徹 1978 『東谷・前山2号墳・古川地』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集
- 柿沼幹夫他 1979 『下田・諏訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集 埼玉県教育委員会
- 川口 潤 1989 『本郷前東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業同報告書第78集
- 齋持和夫 1993 『ウツギ内・砂田・柳町』埼玉県埋蔵文化財調査事業同報告書第126集
- 古池晋禄 1995 『町田西遺跡(第2次)』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第44集
- 志河内昭彦 1990 『雷電下遺跡—B・C地点—』児玉町文化財調査報告書第13集
- 志河内昭彦 1999 『雷電下Ⅲ・南ノ前遺跡』児玉町文化財調査報告書第32集
- 志河内昭彦 2000 『天田遺跡—B地点の調査—』児玉町遺跡調査会報告書第11集
- 志河内昭彦 2003 『大久保遺跡—B地点の調査—』児玉町遺跡調査会報告書第14集
- 駒宮史朗・坂本和俊 1973 『枇杷橋遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告書20集
- 駒宮史朗他 1979 『雷電下・飯玉東』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第22集
- 斉藤孝正 1995 『I 東海西部』『須恵器集成図録』第三巻日本編一
- 佐々木幹雄他 1980 『大久保山Ⅰ』早稲田大学本庄校地文化財調査室
- 佐久間豊 1986 『房総をめぐる奈良・平安時代土器生産体制の展開に関する諸問題』『研究紀要10』千葉県文化財センター
- 佐藤康二 1998 『砂田前遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業同報告書第198集
- 佐藤忠雄 1983 『西浦北・宮西』岡部町教育委員会

- 澤出晃越 1990 「上敷免遺跡(第3次～第6次)・上敷免北遺跡(第3次)」深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第26集
- 末木啓介 1999 「埼玉県における平安時代の黒色土器と土器生産について」『土曜考古』23号
- 鈴木徳雄 1981 「金屋遺跡群」児玉町文化財調査報告書第2集
- 鈴木徳雄 1983 「阿知越遺跡Ⅰ」児玉町文化財調査報告書第3集
- 鈴木徳雄 1984 「いわゆる北武蔵系土師器坏の動態」『土曜考古』9号
- 田中広明 1992 「新屋敷東・本郷前東」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集
- 田中広明・末木啓介 1997 「中堀遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集
- 田中広明 2001 「関東地方の陶軸陶器の流通と古代の社会(2)」『研究紀要』第16号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 徳山寿樹 1997 「金佐奈遺跡-A1地点の調査-」児玉町文化財調査報告書第24集
- 徳山寿樹他 1998 「金佐奈遺跡-A2地点の調査-」児玉町文化財調査報告書第29集
- 徳山寿樹他 1999 「金佐奈遺跡Ⅱ-B地点の調査-」児玉町文化財調査報告書第33集
- 利根川章彦 1999 「折原石遺遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第225集
- 富田和夫 1997 「関東西部」『古代の土師器生産と焼成遺構』遺跡研究会
- 富田和夫 2000 「大寄遺跡Ⅰ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第268集
- 島羽政之 1995 「中宿遺跡」岡部町埋蔵文化財調査報告書第1集
- 島羽政之他 2001 「熊野遺跡Ⅰ」岡部町遺跡調査会埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
- 中島 宏 1980 「伊勢塚・東光寺裏」埼玉県遺跡発掘調査報告書第26集
- 中村倉司 1980 「熊谷神社前遺跡-一本松古墳」埼玉県遺跡調査会報告書第39集
- 中沢 悟 1981 「清里・陣場遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中島 宏 1980 「伊勢塚・東光寺裏」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集
- 永井いづみ 2002 「出土土器の様相」『大寄遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第280集
- 西井幸雄他 1999 「城見上/末野Ⅲ/花園城跡/箱石」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第211集
- 服部実喜 1988 「関東地方における平安時代後半期の土器様相」『神奈川考古24』
- 福田徳司 1995 「在地産土器の編年と問題点」『王朝の考古学』雄山閣出版
- 福田聖他 2002 「大寄遺跡Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第280集
- 福田 勝 1984 「向田・権現塚・村後」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集
- 堀口萬吉他 1987 「荒川 自然」埼玉県
- 宮本直樹他 2002 「町内遺跡Ⅲ」岡部町埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
- 森 隆 2001 「平安時代の研究史概観」『中世土器研究論集』中世土器研究会
- 山本 嶺 2001 「如意遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第264集
- 山本靖他 1996 「広木上宿遺跡-古代・中世編-」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第170集
- 横川好富他 1981 「清水谷・安光寺・北坂」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第1集
- 渡辺 一 1995 「武蔵国の須志器生産の各段階」『王朝の考古学』雄山閣出版

## 『研究紀要』既刊目録

〔1982〕1982年12月発行

- 縄文中期土器群の再編 …………… 谷井 彪・宮崎朝雄・大塚孝司・鈴木秀雄・青木美代子・金子直行・棚田 勝  
 女形系瓦の一試験…………… 高橋一夫  
 図を越える同范瓦に関する一考察…………… 登岡孝志

〔1983〕1983年3月発行

- 埼玉県における古墳出土遺物の研究 I - 鉄器について - …… 小久保徹・浜野一重・利根川孝彦・山本 慎  
 高橋好信・田中正夫・岩瀬 譲・瀬瀬芳之  
 関東における後期弥生集落の様相 - 複数の炉を持つ住居をめぐって - …… 井上尚明  
 埼玉県出土の鉄滓と鉄塊…………… 高塚秀治・榎 敬・高橋恒夫・村上 謙・佐々木稔・村田朋美・伊藤 薫

〔1986〕1986年8月発行

- 古墳時代の大刀(講演録)…………… 小林行雄  
 埼玉県大宮台地の先土器文化…………… 水村孝行・田中英司・西井幸雄  
 縄文時代中期中葉の住居形態…………… 石塚和則  
 北武蔵における古瓦の基礎的研究 I…………… 登岡孝志・宮 昌之・藤原高志・木戸春夫・赤熊浩一

〔第4号〕1988年1月発行

- 神子柴文化をめぐる諸問題 - 先土器・縄文の面期をめぐる問題(一) - …… 栗島義明  
 縄文時代の土偶装飾をもつ土器について…………… 浜野美代子  
 北武蔵における古瓦の基礎的研究 II…………… 登岡孝志・宮 昌之・木戸春夫・赤熊浩一  
 関東における中世在地産土器について…………… 浅野晴樹  
 ガラス小玉の製作と着色技法について - 伊勢原遺跡出土のガラス小玉を中心として - …… 立石盛詞・井上 薫

〔第5号〕1989年3月発行

- 井草式土器及び周辺の土器群について…………… 宮崎朝雄・金子直行  
 東国における後・終末期古墳の基礎的研究(1)…………… 田中広明・大谷 敏  
 終末期古墳出現への動態 I - 変容する在地首長層と造墓の展開 - …… 田中広明  
 古代葉芥遺跡の再検討 - 部衝・塚家・一般集落 - …… 井上尚明

〔第6号〕1989年3月発行

- 羽状縄文系土器の文様構成(点描) - 1…………… 黒坂慎二  
 集落資料集成の一方法 - 縄文時代中期集落を中心として - …… 石塚和則  
 前方後方墳出土土器の研究…………… 高橋一夫  
 関東地方における甕・大型甕・須恵器出現時期の地域差…………… 中村倉司

研究紀要 第19号

2004

平成16年7月26日 印刷

平成16年7月30日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里町船木台4-4-1

電話 0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社